

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介

竹幽文庫蔵『源氏千種香』は、『源氏物語』五十四帖にちなんだ五十四種類の組香の作法を記した伝書である。安永二年（一七七三）の自叙をもつ。菊岡沾涼著『香道蘭之園』所収本は、元文二年（一七三七）頃の成立だが、桐壺香・夢浮橋香がない。そこで、簞木香・梅枝香・玉鬘香・若菜下香について、さらに両者を比較したところ、組香の方法は、蘭之園本に比べ、竹幽本の方が総じて複雑になっていることがわかった。また、物語の内容と合わない箇所が少なくない蘭之園本に対し、竹幽本は、物語に合わせて手直ししていることが認められる。すなわち、蘭之園本は、『源氏小鏡』（第一系統）を参照して作成されているようであるが、竹幽本は、『源氏小鏡』（第二系統）、あるいは『源氏物語』そのものに拠っていると考えられるのである。

一 はじめに

竹幽文庫蔵『源氏千種香』（以下、竹幽本^①）は、『源氏物語』五十四帖にちなんだ五十四種類の組香（香木を炷^たき、その香の異同を言い当てる遊戯）の作法を記した伝書である。『源氏千種香』といえば、夙に、元文二年（一七三七）頃に成立した、菊岡沾涼著『香道蘭之園』（全十巻）の第八・九巻所収のテキスト（以下、蘭之園本）が知られているが、竹幽本は、蘭之園本に比して、組香の数において、著しい特徴が見られる。すなわち、蘭之園本には桐壺・夢浮橋の二帖の組香がないが、竹幽本は全五十四帖を収めるのである^②。また、内容についても、両者で少なからぬ相違が見られる。そこで、ここに竹幽本の一部を紹介し、

矢野環
岩坪健
福田智子

いささかの所見を述べるとともに、巻末には、附録として、当該箇所影印と十炷香札・折居・香之記の写真を掲載する。

竹幽本は、花・月・秘記の三冊と香包銘書から成る。いずれも料紙は楮紙で、袋綴じの写本である。

花・月・秘記の表紙は、紺色布目地に金切箔散らし金泥霞引秋草下絵。鳥の子内曇の金泥秋草下絵の題簽に、「源氏千種香

花」「源氏千種香 月」「源氏千種香 秘記」と外題を記す。また、本文の前後に、各一丁の遊紙がある。

花・月冊は、縦二六・二センチ、横一六・六センチ。内題なし。

墨付は、花冊九二丁、月冊八四丁。両者とも一面七行書きを基本とする（寄生香は八行書き）。各丁には匡郭が墨で施されている。ちなみに、蘭之園本には匡郭はない。

花冊の冒頭には、「隨鳳老人」の草稿をもとにまとめたという「秋風閣其山」なる人物の安永二年（一七七三）の自叙が載り、「蘭亭」と「秋風閣」の二つの朱印がある。また、月冊末尾には、当時一般に見られる版本の様式さながらの跋文があり、「洛外隱士 隨鳳軒授與」と記される。芸道伝書では、序文や跋文を備え、また朱印を捺すという様式がよく見受けられる。匡郭を施すものは、本書より遥かに大部の例もあるが、決して多くはない。

秘記は、縦一五・八センチ、横二〇・一センチの横本。内題は

「源氏千種香秘記」。墨付五丁。花冊の自叙と同じく、「其山」による安永二年の奥書と「秋風閣」の朱印がある。

香包銘書は、縦二三・六センチ、横一六・六センチ。本表紙を付ける前の仮綴じの状態で、外題「千種香 香包銘書 五十四組」は、打付書きである。全丁墨付で十三丁ある。印はない。

なお、竹幽本は、「香道籬の菊 源氏千種香 其外數品入」と上書きされた桐箱に収められている。この『香道籬の菊』も、注目すべき内容をもつ総合的香道書であり、竹幽本『源氏千種香』と同時期に作成されたと見られる点でも注意される。

二 翻字と考察

本稿では、竹幽本の自叙および跋文と、五十四種の組香のうち、帚木香・玉鬘香・梅枝香・若菜下香の四つを採り上げ、翻字と考察をおこなう。翻字には、適宜句読点を施し、一面の終わりには「」を付したが、濁点は、底本に存するもののみに限った。また、朱書は（朱）と示した。考察では、本文内容の概略を記すとともに、蘭之園本との比較をおこない、さらに、各組香については、『源氏物語』当該巻との関わりについて簡略に述べる。

なお、尾崎左永子・薫遊舎校注『香道蘭之園』（淡交社、二〇〇二

年四月。増補改訂版二〇一三年五月。以下、『校注』の解説によれば、「源氏千種香」は、『源氏物語』が踏まえられてはいるものの、物語の内容と一致しない箇所も少なからず見られるという。これは、「源氏千種香」が、『源氏物語』そのものではなく、『源氏小鏡』（南北朝時代に編纂された『源氏物語』の梗概書）に拠ったためであることが、武居雅子氏によって指摘されている。⁽³⁾『源氏小鏡』には、物語と異なる内容を有する個所が少なくない。そこで、竹幽本についても、『源氏小鏡』を視野に入れ、同様の視点から考察する。本稿でもまず、武居氏が考察された四帖を採り上げる。

1 自叙および跋文

【翻字】

自叙 「印」

一日あるひ隨鳳老人、源氏千種香と題せる艸稿を携来り。是やんごとなき御家にて聴聞したる荒増を、そこ爰となく写し得て、珎となし置ぬ。ひとり徒に見むも便なく密ひそに傳ふと取て聞きするに、新組香五十四品をあつめ、源氏物語の巻くの名をかりて組の名となし、巻中の秀歌「あるひは詞の雅なるをゑり用ひ、おかしく花

やかなる組あまた見えたり。誠に秘蔵すへき奇品なるべし。抑文龜の頃、室町家贈相国の御時、三々九葉に一花を加へ、十炷香と號け、諸の組番の権輿はしめとなれり。星うつり霜経りて

おほけなくも百九繼も、こ、の、つぎの 聖主女院の御所

相ともに此道を深く好せ給ひ萬國より佳種かしゆを「

奉りておやみなく日毎の御遊なりしかば、其中には

勅作女作、或は博陸はくりく大尉の組せ給ひしも有り。

おほろけの外に、月卿雲客のきそひ作らせられし

も世に弘まり、そなれの貝のかぎりなき数く

実に風流の翫ひ、貴も賤しきも心のいとま

有によせて、盧橘のむかしにかはらず、誰かさらに

拾ひろざらん也。故に、其ことくさを撰ひらびつらねて「

耽ふける友どちの慰にもならんかすと、清書して

庫中に永く留るよしを叙とせり。

安永みつとのとのみ

泰正下浣

秋風閣其山書

「印」

〔跋文〕

不佞積年汲御家末流尚集其餘諸流
著導初心書許多編畢今所授之

稿冊子亦加刪補校訂須大成焉若

向來得志深執心之人而於有相傳者

其喜不可有際限者也

洛外隱士

隨風軒授與

〔書き下し〕

不佞、積年、御家の末流を汲み、尚、其餘諸流を集む。

初心を導く書、許多の編を著し畢ぬ。今、授くる所の

稿冊子も亦、刪補・校訂を加へ、須く大成すべし。若し

向來、志深き執心の人を得て、相傳有るに於いては、

其の喜び際限有るべからざる者也。

【考察】

自叙および跋文によれば、竹幽本成立のおおよその経緯が知

られる。「隨風老人」が、「秋風閣其山」のもとに、『源氏千種

香』の草稿を持ち込み、それをもとに「其山」が著したのが本

書である。

跋文の「隨風軒」は、「隨風老人」その人と見られるが、御家

流の流れを汲みつつ他の流派の作法をも収集したという跋文の内容は、この草稿についてもあてはまるであろう。この「隨風老人」については、現時点では未詳であるが、あるいは「彩鳳隨鳥」（妻が夫を冷淡に遇すること。杜大中の妾が夫に対して不平を言うのに、自分を鳳に、また夫を鳥になぞらえたという『事文類聚』所載の故事による。）に拠る雅号であろうか。

なお、自叙中の「抑文亀の頃……」以下の記述は、『香道蘭之園』一卷、「十炷香の本原」を下敷きにしている。以下、当該箇所
の文章を示し、表現が一致あるいは類似する部分に傍線を付す。

一 夫十炷香は組香の本元也。文亀の頃室町家贈相国の時、三

々九葉に一花を加へて これを十炷香とす。もろくの組

香は此十炷香を根とせり。(……中略……)

其後元和寛永の頃、後水尾の皇○女院の御所、相ともに此道
道をふかく好ませ給ひ、此の御宇に至て万国より佳種を奉
りて奇品満てり。其御代にこそあまたの組合香をなさしめ
給ふとなり。凡一百余品といへども、日々夜々の御遊なり
しかばその際限あらざるに、その中に勅作あり院作あり、或
は博陸大尉の組まれ玉ひし香あり。月卿雲客こ、ろくに
作せられ、折にふれ節にしたがひ叡覽に備へられしより、多

くの組香世にひろまれりとぞ。⁽⁵⁾

2 帚木香

【翻字】

△帚木香

数ならぬ伏屋におふる名のうさに

あるにもあらずきゆる帚木

一 十炷香の札を用ゆ。

一 数ならぬの香一包、名のうさにの香一包各同香、ふせ屋におふるの香一包、あるにもあらずの香一包各同香、きゆる帚木の香、

一包各香、都合五包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。」

一 数ならぬの香斗外に拵へ、試に出す。其餘の香、皆試なし。

一 出香の香包、左のごとし。

数ならぬの香
ふせやにおふるの香 金紙の香包を用

名のうさにの香
あるにもあらずの香
きゆる帚木の香 銀紙の香包を用

右之通、香を包て、都合五包、能く打交置て、金銀金銀銀

と一炷充取て、焚出すべし。」

一 聞様并札打様左のごとし

有試同香

一番(朱) 三番(朱) 数ならぬ

二番(朱) 四番(朱) 五番(朱)

花一の札(朱)

名のうさに 月

一の札(朱)

無試同香

一番(朱) 三番(朱) 金包ふせやにおふる 花二の札(朱)

二番(朱) 四番(朱) 五番(朱) 銀包あるにもあらず

月二の札(朱)

無試一炷

二番(朱) 四番(朱) 五番(朱) 銀包きゆる帚木 ウ

の札(朱)」

五炷皆聞終て、一同に札をうつ也。夫故に皆焚終て折居五つ重て廻し、札を受るべし。

一 記録は、客香三点、二人より二点充。地香、独聞二点、二人より一点充也。客香不中は、何人にも星二つ充附るべし。皆中は聞の下に、褒美に、空蟬と朱にて認るべし。皆中にてなくとも、客香聞たるは小君と認る也。客香不聞、地香斗聞たるは、園原と認べし。記録書様左に記す。」

帚木香之記

〔表〕

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

帚木香では、「香元」(香席で香を炷く人)から、まず、「試

香」(本番前の香席。本番の香席に出される香をあらかじめ聞いて香を覚えておく)として一度、香炉を回す。それから「本香」(本番の香席)が五度、「出香」(本香において香元から香炉を回すこと)される。

本香における香包(香が包んである紙)の色は、香炉が回される順に、金・銀・金・銀・銀。このうち同じ香なのは、金と銀のペアで、二組ある。三つある銀の、残り一つは「客香」といい、その他の「地香」よりも高級な香を用いる。

さて、試香と同じ香(「同香」という)であるのは、金色の包み、すなわち一度目あるいは三度目の香であることを前提に、五度炷かれる香を、同香二組と客香に聞き分ける。従って、全部で十二通りの答案が想定される。

答えには、「十炷香の札」(写真1)を用いる。全十二枚の札で、「一」「二」「三」「花一」「花二」「花三」「月一」「月二」「月三」に、「ウ」(「客香」の「客」の字のウ冠を表した札)が三枚ある。金包みの香二つのうち、試香と同香ならば「花一」をも、う一方には「花二」の札で答える(答えの札を出すことを「打つ」という)。さらに、三つの銀包みの香も、試香および「花一」と同じならば「月一」を、「花二」と同じならば「月二」を、そして残りのひとつには「ウ」の札を打つ。

札は、香をすべて聞き終わった後、五つ重ねた「折居」(紙を

畳んだ入れ物。金や銀で裝飾されたものが多い。写真2参照)に、出香順に一枚ずつ入れる。

「香之記」(香席の記録。表題は、「箒木香之記」とあるように奇数文字で記す慣習がある。)には、正解と各人の答案が、証歌(組香の主題となる和歌)に置き換えて記される。すなわち、「数ならぬ」(花一)、「ふせやにおふる」(花二)、「名のうさに」(月一)、「あるにもあらず」(月二)、「きゆる箒木」(ウ)である。客香と地香とでは採点方法が異なり、客香の「独り聞き」(聞き当てたのが一人だけの場合)は三点、二人以上の場合二点であるのに対し、地香は、「独り聞き」は二点、二人以上の場合一点である。客香が聞き当てられなかった場合は、星を二つ付ける。組香の場合、星は不正解だった時に記す記号である。全部聞き当てた人には「空蟬」、客香を聞き当てた人には「小君」、地香だけを聞き当てた人には「園原」と記す。

蘭之園本では、本香は、「箒木」「園原」「伏屋」各三包、合計九包、九度出香される。試香は「箒木」のみ。本香九炉を三炉ずつ三回に分け、三度答える。これを「三炉聞」という。すなわち、「箒木」がひとつあれば「木」、ふたつあれば「林」、三つすべてであれば「森」、全くなければ「木陰」の札を出す。「園原」「伏屋」は「聞き捨て」(香を聞いても答えを出さない)のため、どの順序に出てきたかは不問である。竹幽本に比べ、全

体的に簡便な方法と言えよう。

(2) 『源氏物語』との関わり

当巻において、蘭之園本では、次の和歌を挙げている。

その原や伏屋におふる名のうきにあるにもあらずきゆる
は、き、

この歌について、『校注』の解説では、以下の二首を出典として引き、それらを合わせた歌、すなわち「出典歌二つを合わせた証歌」としている。

その原や伏屋におふる箒木のありとはみえてあはぬ君哉

数ならぬ伏屋におふる名のうきにあるにもあらずきゆる箒
木(以上、傍線筆者)

一首目は、二十六歌仙の一人である坂上是則の『新古今和歌集』に採られた歌。二首目は『源氏物語』において、登場人物の空蟬が詠んだ歌である。たしかに『校注』が指摘するように、蘭之園本の和歌は、初句・二句が是則歌、二句目以下が空蟬の歌と同一とわいていい。しかし、武居氏が指摘されたとおり、蘭之園本の歌は、『源氏小鏡』所収歌と全く一致するのである。

一方、竹幽本は、空蟬歌と歌句が全く同一である。それでは、竹幽本が、『源氏小鏡』からではなく、『源氏物語』から直接引用したかという点、事はそれほど単純ではない。というのは、『源氏小鏡』諸本は大きく六系統に分かれているが、そのうちの

第二系統は、物語本文と同じ「かずならぬ」という初句を有するからである。この箇所に限らず、全帖を通して、『源氏小鏡』の第二系統は、第一系統を基にしつつ、物語と齟齬する部分は青表紙本『源氏物語』で改訂したため、第一系統より物語に近くなっている⁶⁾。『源氏小鏡』は、江戸時代になると、刊行され版を重ねたが、いずれの版も、本文は第二系統である。よって、竹幽本は、『源氏物語』そのものに依拠したかもしれないが、『源氏小鏡』第二系統に依拠した可能性もあるのである。

3 玉鬘香

【翻字】

△玉鬘香

恋わたる身はそれなれと玉かづら

いかなるすぢを尋きつらん

一 十炷香の札を用ゆ別札七枚を
用ゆる秘傳あり(本)

一 赤の香、紅梅の香、白の香、縹ハナダの香、柳の香、梔ウヂナシの香、各

一包充、色の香六包客香也。二包、
充別香三種を用、都合十二包打交て、其内二包

除け、残十包を二包充取て焼合にして⁵⁾五度に出す。試香

に秘傳有。口授すべし。

一出香の順によつて、記録に玉鬘君、紫上、明石上、花散里、末摘花、空蟬尼と認る事あり。又衣配の傳といふて、今や

う色、ゆるし色、かとり色、おち、くり色、此四色ヨロノイロに札を
うつ事もあり。習ひ成るゆへあからさまに述べたし。容易
に此組は催事に非らず。連理香傳受の人あらは教へを受て
深秘の面白きを辨知べし。」

〔参考〕『源氏千種香秘記』

△玉鬘香

一 十炷香札を用る打様

色香一包に別香一包充

組合様口傳十炷香焚終て
包紙を開くべし

- (赤色) 一ノ札 (赤色) 月一ノ札
- (紅梅色) 二ノ札 (紅梅色) 月二ノ札
- (白色) 三ノ札 (白色) 月三ノ札
- (縹ひんがし色) 花一ノ札 (縹色) ウノ札
- (柳色) 花二ノ札 (柳色) ウの札
- (梔あざみ色) 花三ノ札 (梔色) ウノ札

ウ札三枚の打様に習あり。

たとへば柳色と出たるに、ウノ札打初は一枚。其次梔色と出たる
に、花三ノ札二枚打。又後に縹色と出れば、花一ノ札二枚打。皆
是に準知べし。

一 別札を用る仕様

色香六包、別香六包打交、「其内二包除き、残り十包を
二包充取て、五度に焚出すべし。」

札銘

- 今やう色 一枚
- ゆるし色 二枚
- かとり色 三枚
- おち、くり色 一枚

如此七枚の札を二枚残し、五枚打べし。是を衣配キヌクバリヨツイロ四色の

傳と」号け、面白き習あり衣配色の事は確。
氏物語に見たり

一 出香の順、并、点の掛様、聞の多少によつて、紫上・明石
中宮・花散里上・末摘花上・玉鬘内侍・空蟬尼・光源氏と、
其名を記録に認る事あり。極秘なる故口決ならでは教がた
し。

〔二行分空白〕

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

玉鬘香は、試香に秘伝があるというが、その内容は、『源氏千
種香秘記』にも記されていない。答え方から考えると、試香を
行うのは確かである。そもそも、焼合香は伝授物とされており、

安易に行うことはない。

準備される香は、「赤」「紅梅」「白」「縹」「柳」「梔」の地香六種類、各一包と、客香「色」の香三種類、各二包である。これら十二包の中から、地香と客香を各一包ずつ、計二包を無作為に取り除き、残り十包を用いる。本香は、地香と客香を一包ずつ組み合わせて「焼合たぎ」（雲母板の対角線上に同時に二種類の香を載せて炷く方法。香の置き方、香炉の扱いなどの聞き方は、流儀により微妙に異なる）にし、五度出香される。焼合の二種類の香のうち、香炉を正面に向けて手前にある香から聞く。なお、二種類の香を一度に炷く組香には、高位の伝授物「連理香」がある。雲母板の中央に二種類の香を隙間のないように付けて置くもので、作法の控えはあるものの、完全に口伝である。答へには、十炷香の札を用いる。また別札七枚を用いることもあるといい、この「秘傳」については『源氏千種香秘記』に言及がある。

十炷香の札を用いる場合、地香六種類と客香との組合せを、香を聞いた順序も考慮して、対応する十二枚の札の中から選ぶ。地の香の種類はすべて区別するが、客香のそれはとくに区別しない。なお、客香「色」の香が先、地香「縹」「柳」「梔」が後の場合は、一様に「ウ」の札を打つ。

一方、別札を用いる場合は、「今やう色」一枚、「ゆるし色」

二枚、「かとり色」三枚、「おちやくり色」一枚の計七枚から五枚を選択して打つというが、この「衣配四色の傳」については、香の組合せとの対応も記されず、詳細は未詳である。七枚という枚数は、おそらく蘭之園本の影響を受けたのであろう。

「香之記」には、香席の上座の人から、「玉鬘君」「紫上」「明石上」「花散里」「末摘花」「空蟬尼」と記すこともあるという。一方、『源氏千種香秘記』には、成績も加味して「紫上」「明石中宮」「花散里上」「末摘花上」「玉鬘内侍」「空蟬尼」「光源氏」と七通りに記録することもあると述べられている。「香之記」の具体例は、竹幽本には掲載されない。意識的に隠してあるものと推察される。

蘭之園本では、竹幽本の地香六種類に「紅る」を加えた七包に、色の香を七包を組み合わせる「二炷聞」（二種類の香を順に聞き、その組み合わせで個々の香を答える。ペアでひとつの答えを出すこともある）で、竹幽本の「焼合」とは異なる。また、竹幽本では、試香に「秘傳」があると記されるが、蘭之園本では、地香には試香があり、色の香にはないと明記される。二炷のうち、色の香が先であった場合は「衣配りの札」を打つ。「衣配の伝受」では四つの色に打つ方法があるというが、「伝受」のない人は「衣配りの札」を打つのみ。「衣配の伝受」に関する竹幽本と蘭之園本の比較については、後述する。

(2) 『源氏物語』との関わり

当巻では、年の暮れに光源氏が女性たちに正月用の晴着を贈った。その衣装の色と人物を、蘭之園本は次のように組み合わせる。

赤―紫の上 紅梅―梅壺 白―明石の上

縹はなだ花散里 柳―末摘花 梔くろなご子―空蟬 紅―玉鬘くれなひ

第一系統『源氏小鏡』もほぼ同じであるが、唯一、「紅梅」が「明石の姫君」である点が異なっている。もちろん、この方が物語の内容に合う。武居氏が指摘された通り、蘭之園本は、若菜下巻（後出）でも、梅壺が登場して箏の琴を演奏するが、物語でその楽器を担当したのは明石の姫君である。このように、蘭之園本には、明石の姫君を梅壺とする箇所が複数存する点には注意しておきたい。

一方、竹幽本は、「赤―玉鬘」、「紅梅―紫の上」で異なり、「紅―玉鬘」を欠く。物語では紫の上が「紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小袿、今様色のいとすぐれたる」、玉鬘は「曇りなく赤きに、山吹の花の細長（7）」であるので、蘭之園本より竹幽本の方が物語に合う。第二系統『源氏小鏡』でも、紫の上と玉鬘の衣装描写は物語とほぼ同文であり、明石の上・末摘花・空蟬の三人を欠いてはいるが、もし、竹幽本が第二系統を参照したとしても、「赤」の玉鬘、「紅梅」の紫の上と改めることは可能である。

衣配りの伝について、蘭之園本は、「札の銘」として「今やう、ゆるし、かとり、おちちくり（8）」を列挙している。竹幽本も「衣配の伝といふて、今やう色、ゆるし色、かとり色、おちちくり色。此四色に札をうつ事もあり。習ひ成るゆへ、あからさまに述かたし」として、詳細は別冊に譲っている。『源氏小鏡』を見ると、第一系統は四色すべてを記載しているが、第二系統は「おちちくり」を欠く。物語では今様色と許し色は当巻の衣配りの場面に見られるが、落栗は行幸巻に一例しかなく、黒ずんだ濃い紅色かと推定されている。縹（9）も別の巻（須磨巻・橋姫巻）に一例ずつあるだけで、色目ではなく絹布の一種である。よって、蘭之園本の四色は、第一系統『源氏小鏡』に基づいており、竹幽本はそれに倣ったと考えられる。つまりこの四色は、物語の内容および『源氏小鏡』第二系統と異なるけれども、竹幽本は、そのいずれによっても直すことはしなかったと見られる。

竹幽本の別冊『源氏千種香 秘記』には、「是を衣配（10）四色の伝と号す。面白き習あり（11）とある。しかしながら、前述したように、「かとり」は色目ではなく、落栗の誤写かと思われる「おちちくり」は、物語では他の巻にしかないので、割注の記述「衣配色の事は源氏物語に見たり」は、物語の内容に当てはまらない。あるいは、割注の「源氏物語」は、物語そのものではなく、『源氏小鏡』を指すのかもしれない。

4 梅枝香

【翻字】

△梅枝香

花の香はちりにし枝にとまらねど

うつらん袖にあさくしまめや

一 一炷開也。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 組合聞五人充
五組也一 一二三客の香三包容、以上十二包打交出香」とす地香外に換試に
出す客試なし

一 人形配様左に記す。

源氏人形一

人形銘々聞人に渡し

上童人形一薰物名
侍從名

是一組也。

置く。一炷開て盤にのせる

紫上人形一

べし。其時は客香の

上童人形一薰物名
梅花

差別なく一間目にのせる

是一組也。

斗也。

残り三組是に等し。

同盤の圖

一 客香独間の差別なく、何人にてても二間充、地香何人」にて

豎溝五筋 [図]

一 も一間充、客地香の内にてても、三炷の続聞は、何人にてても

横界二十間 [図]

一 一間の褒美をつけて進すべし。

一 一組の人形、何方にて成りとも、同目に行合たるを、一の勝

とす。其時は、薰物タキモノを合たると云心にて、人形は向合せて、

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

一所に立置き、其後、香は開て、札は打ども、人形の動はなし。一組の内にて聞の多少に構わす、何方にて成とも、同目に行逢たらば、其組の勝と定むべし。」

一 二の勝定れば、香は残りても盤は終る也。

但し、兵部卿の人形、批判の組にて、各別なれば、一二の勝の内には有りたらば、三の勝の組有るまで、盤は納るべからず。一二三の勝迄には、褒美として懸香を遣すべし。

一 記録は、三炷の続聞は、客地香の差別なく、何人にてても三点充也。客香、独間の差別なく二点充、地香、何人聞にても一点充也。記録認様、左のごとし。」

梅枝香之記

〔表〕

梅枝香立物圖

〔図〕

梅枝香は、香を聞き当てることに、盤上で人形や小道具を移動させて点数を競う「盤物」である。「光源氏」「紫上」「兵部卿」「明石上」「花散里」がそれぞれ「上童」と組になり、二人ずつ五組で行う（「組合聞」という）。

地香三種類、客香一種類が各三包、計十二包準備され、十二度出香される。試香は、地香三種類のみ、計三度の出香である。客香に試みはない。

答えには、十炷香の札を用いる。試香の順に、地香には「二」「三」の札（「月」「花」の文字が記される札も、単なる数字札として流用する）を、客香には「ウ」の札を打つ。

香を聞くたびに、回ってくる折居に札を打ち、正解が公表される（「一炷開」という）。人形は、組ごとに向かい合わせて盤外に置いておき、聞き当てたら盤上の一問目に置く。その後、聞き当てるたびに、客香は二問、地香は一問進む。三回連続で聞き当てた場合は、さらに一問を加え、客香は三問、地香は二問進む。一組の人形が、同目に行き合わせたら勝。勝が二組決まれば終了となるが、兵部卿の組がその中に入っていれば、三組目の勝が決まるまで継続する。

「香之記」は、客香二点、地香一点、三回続けて聞き当てた場合は、客香・地香を問わず三点として採点を記す。

蘭之園本は、三回連続で聞き当てた場合は五問進むという点

が、竹幽本と若干異なるが、その他の方法はおおむね同じである。ただし、レーンへの人形の配置が逆になっており、これは、香炉を廻す方向が逆であることを示すと考えられる。

(2) 『源氏物語』との関わり

当巻において、光源氏は、薫物の調合を女君たちに依頼し、また自らも調合した。人物と薫物の組み合わせを列挙すると、蘭之園本は以下の通りである。

紫の上―梅花　明石の上―黒方　花散里―荷葉　源氏―侍従

これらは、第一系統『源氏小鏡』と共通する。一方、竹幽本が蘭之園本と異なるのは、明石の上が薫衣香である点である。これは、『源氏物語』および第二系統『源氏小鏡』¹⁰も同様である。そうすると、竹幽本はいずれかに拠ったことになりそうであるが、その他にも、先行する蘭之園本に直接依拠したらしいことが知られる箇所がある。

○たき物を合せたるといふ心にて、人形は向合て一所に立置。其後香はき、て記録には記し、人形はうこかぬ也。（中略）
一二の勝すめは、香は残りたるとも、それかきりにて盤のせうふは終る也。「蘭之園本」

○薫物を合たると云心にて、人形は向合せて一所に立置き、其

後、香は聞て、札は打ども、人形の動はなし。(中略)二の
 勝定れば、香は残りても盤は終る也。「竹幽本」
 これは偶然の一致ではなく、竹幽本は蘭之園本をも参看してい
 るのであろう。

第一系統『源氏小鏡』は、前掲のように四人しか挙げないが、
 第二系統は、朝顔齋院の黒方も加わり、五人になる。物語でも、
 齋院の黒方が焚かれた。従って、竹幽本が、物語か第二系統『源
 氏小鏡』のみを基にして作成されたならば、五人の人物が採り
 上げられるのが自然であろう。にもかかわらず、蘭之園本と同
 じ四人の人物が列挙されるのは、蘭之園本に倣ったためと見ら
 れる。蘭之園本も竹幽本も、当巻は盤物で、中央に判者の兵部
 卿宮を設け、左右に源氏・紫の上と明石・花散里を配置したた
 め、齋院は置けないという事情もあったように推察される。

5 若菜下香

【翻字】

△若菜下香

夕やみはみちたとくし月まちて

かへれ我せこそそのまにも見ん

一 一炷開也。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 組合開五人充。

一 一二三客の香、三補充、以上十二包打交、出香とす

地香外に試有り。客香試なし。」

一 立物女楽の式、左のごとし。

左ヨリ此順也。

女三宮人形一 小道具 琴キ一 柳一枝 二人組

紫上人形一 同 和琴一 桜一枝 二人組

光源氏人形一 小道具 是は唱歌の役也 二人組

桐童女御人形一 小道具 箏シヤウノコト一 藤一枝 二人組

明石上人形一 同 琵琶一 橘一枝 二人組

一 一組兩人共に地香を聞ば、一問進む。一方斗中は進まず。兩

人」ともに客香を聞は、二問充進すべし。一人斗にては一

問進すべし。客地香の内、兩人共に間違と一問退く也差別なし。差別なし。

一 五問目に至て、其次の香を聞ば、それくの小道具を六問

目の畔に飭る也新るも。一柱也。又其次の香を聞ば、人形、七問目に至

るべし。

一 九問目に至れば銘々の花を立るべし。

一 源氏の人形、進退かわる事なし小道具。

一 記録は中り斗を記す。認様左のごとし。」

若菜下香記

〔表〕

若菜下香立物圖

〔図〕

〔図〕

同盤の圖 豎溝五筋 横界十二間

〔図〕

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

若菜下香は、二人ずつ五組で行う組合間の盤物である。本香は、地香三種類、客香一種類、各三包計十二包、十二回の出香。試香は、地香三種類のみ、計三回の出香で、客香には試みがない。これらの点に加え、一炷開である点や、十炷香の札を用いた答え方も、先の梅枝香と同じである。

人形は、上手かみてから「女三宮」「紫上」「光源氏」「桐壺女御」「明石上」の順に置く。一組両者ともに聞き当てた場合、地香は一問、客香は二問進む。一組のうち一人のみ聞き当てた場合は、地香は進めないが、客香は一問進む。また、両者ともに誤った場合は一問後退する。

五問目に人形が進み、次の香を聞き当てた場合は、六件目に小道具（琴・和琴・箏・琵琶）を飾る。次に聞き当てた場合は、人形を七問目に進める。九問目に来たら、花（柳・桜・藤・橘）

を立てる。なお、光源氏の人形には、小道具はない。

「香之記」は、正解のみを記す。客香・地香の区別なく、一回聞き当てるたびに一点を加える。なお、表題は「若菜下香記」とある。「若菜下香之記」と記さないのは、先に触れたとおり、表題の文字数を奇数にするならいに従ったものであろう〔2 箏木香「考察」(1) 竹幽本組香の方法参照〕。

蘭之園本は、竹幽本とおおむね方法は同じだが、一組のうち一人のみ聞き当てた場合は、地香・客香を問わず、進めない。竹幽本が地香・客香の区別をするのとは、異なっていると言える。また、三回連続で聞き当てた場合について、竹幽本ではとくに言及はないが、蘭之園本では、先の梅枝香と同様、五問進む。

(2) 『源氏物語』との関わり

光源氏は、自邸で四人の女君に四種類の楽器を担当させて女楽を催した。これらの女君と楽器の組み合わせは、竹幽本も『源氏小鏡』（第一・二系統）も物語と同じである。蘭之園本も、梅壺以外は物語に合う〔3 玉鬘香「考察」(2) 『源氏物語』との関わり参照〕。

物語と若干異なるのは、「光源氏人形 是は唱歌の役也」（竹幽本）の箇所である。蘭之園本も竹幽本と同様であるが、これ

は、『源氏小鏡』の「源氏、唱歌したまふ」（第一・二系統とも同文）に依拠したからであろう。物語では、唱歌したのは主に夕霧の大将（光源氏の子息）で、源氏はときどき声を添えたにすぎない。

大将、聞きたまふ。拍子とりて唱歌したまふ。院も時々、扇うち鳴らして加へたまふ御声、昔よりもいみじくおもしろく、少しふつつかにもものしき気添ひて聞こゆ。

第二系統『源氏小鏡』は、第一系統よりも記述が物語に近くなっているという傾向があるが、唱歌の部分は直さなかつたようである。同様に、竹幽本も、物語本文を見ながら蘭之園本を参看して手直したとしても、この箇所はそのままにしたと考えられる。やはり盤物では、女君たちを左右に配置し、その中央に置く人形は、光源氏の方がふさわしいと判断されたのであろう。

三 おわりに

『源氏千種香』竹幽本は、蘭之園本を参看しているらしいことは認められるが、意図的な改変がおこなわれた形跡が看取される。それを端的に示すのが、各組香冒頭の巻名歌の有無であった。蘭之園本にはないが、竹幽本はそれを有する。

また、組香の方法も、竹幽本は蘭之園本に比べ、総じて複雑

になっているように見受けられる。全部で十二通りの答えになるように条件が組み合わされた「篝木香」、「焼合」の様式で「香之記」を秘事として明示しない「玉鬘香」、盤物の「梅枝香」「若菜下香」も、蘭之園本に比して、盤上の人形をいくぶんか進めにくい規則になっているように思われる。

また、物語の内容と合わない箇所が少なくない蘭之園本に対し、竹幽本は、物語に合わせて手直ししていることが認められる。蘭之園本は、『源氏小鏡』（第一系統）を参照して作成されているようであるが、竹幽本は、『源氏小鏡』（第二系統）、あるいは『源氏物語』そのものに拠っていると考えられる。竹幽本の成立に、どちらが関与しているのかという点については、今後の課題としたい。

附記

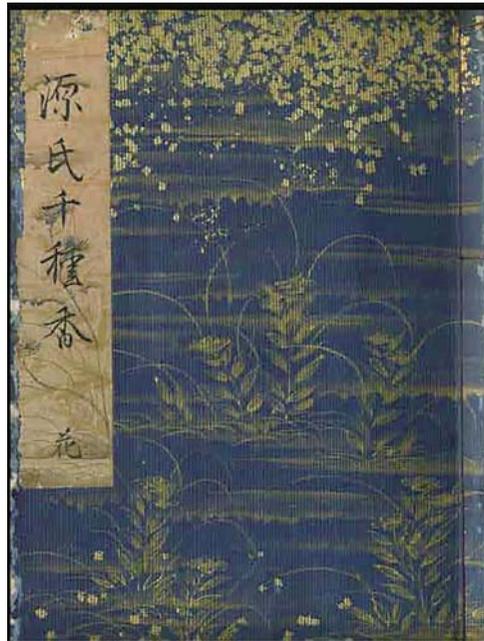
本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一部である。本稿執筆にあたり、国文学研究資料館の入口敦氏、藤島綾氏には、格別の御教示をいただいた。ここに御礼申し上げる。

注

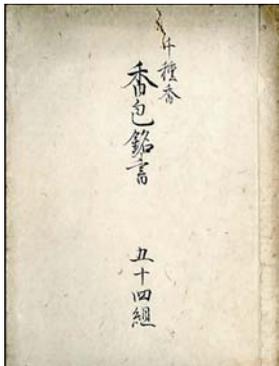
- (1) 竹幽文庫は、非公開個人文庫。竹幽本『源氏千種香』の研究は、本稿が初めてのものである。
- (2) 蘭之園本は、それら二帖の香図を欠く源氏香に倣ったと考えられよう。なお、蘭之園本・竹幽文庫以外の異本は、現時点では管見に入らない。
- (3) 『源氏千種香』の依拠本を探る(『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月)。以下、武居氏の論は、すべてこの論文による。
- (4) 「炷」の本来の読みは「しゅ」であるが、天正期にはすでに「ちゅう」と読まれており、江戸期には「ちゅう」がほとんどである。
- (5) 引用は、前掲の増補改訂版『香道蘭之園』による。
- (6) 伊井春樹『源氏物語注釈史の研究』(桜楓社、一九八〇年)八五〇頁ほか。
- (7) 『源氏物語』本文は、当時よく流布していた『源氏物語湖月抄』版本(同志社大学今出川図書館所蔵)により、適宜、漢字を当てるなど校訂した。
- (8) 『校注』には「かいねり」と翻字されているが、武居氏の調査によれば、宮内庁書陵部所蔵御所本(一六三―八八五)では「おちくり」、宮内庁書陵部所蔵の別写本(二〇七―一五七)と国会図書館本では「ほちゑり」であるという。武居氏が推定された「おちくり」(落栗)の誤写という見方に従う。
- (9) ただし第一系統の本文は「おちくる色」であるが、これも「おちくり色」の誤写であろう。以下、『源氏小鏡』の本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、二〇〇五年二月)による。
- (10) ただし、第二系統に属する整版は「くろゑかう」であるが、「くろゑかう」の誤写であろう。



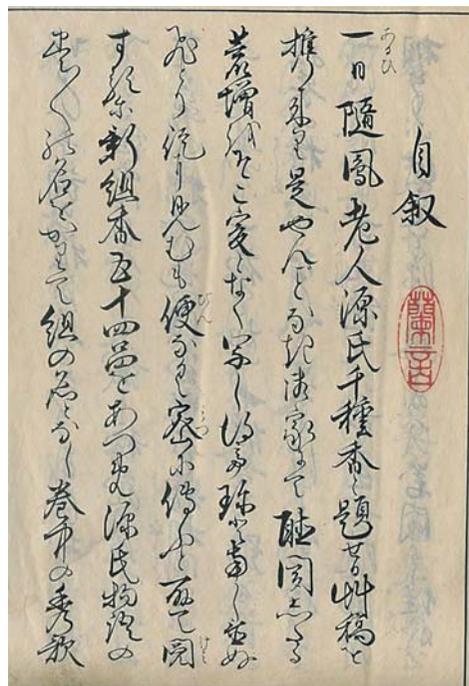
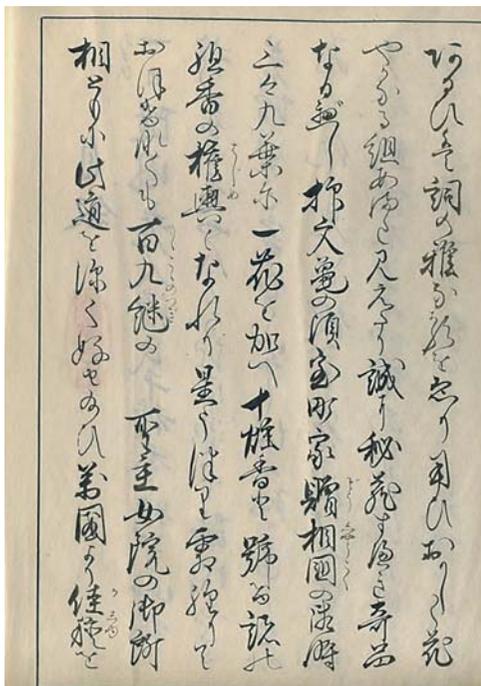
『源氏千種香 秘記』



附録1 影印
▽表紙 『源氏千種香 花』



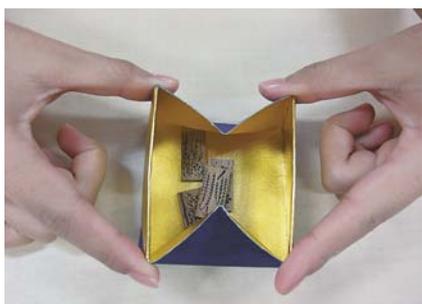
『千種香 香包銘書』



1 自叙および跋文 ○自叙



(写真2) 折居 畳んだところ



開いたところ



表



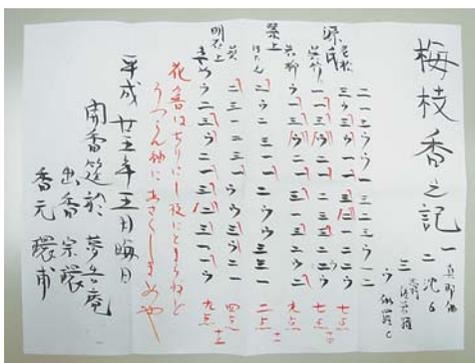
裏

表には松・竹・梅などの絵が描かれており、これにより誰の札かを特定する。
裏には、「一」「二」「三」「花一」「花二」「花三」「月一」「月二」「月三」(各一枚)および「客」(三枚)と記される。

附録2
(写真1) 十炷香札



札を入れるところ



(参考) 香之記の例

